

若越郷土研究

39の1

瓜生 寅の英学

山下 英一

はしがき

本稿を書く機会をいただいで、ようやく瓜生 寅について筆を下す時期が到来したのを衷心からうれしく思う。筆者には『グリフィスと福井』という小冊子があるが、福井の英学の伝統をつくった人として瓜生 寅、雨森信成、今立吐醉の三人について書いた章がある。いずれも福井藩招聘のお雇理化学教師 W・E・グリフィスとの関係から直接にグリフィスと接触して互に影響を与えた人物として、その個人の歴史と仕事について知り得た

山下 瓜生 寅の英学

所を短くまとめたものである。その後、雨森信成については、「若越郷土研究」33の4、33の5、今立吐醉については、「若越郷土研究」34の2で、新しい資料に基づいて書かせていただいた。明治期の福井の英学者をこの三人に絞ったのはあくまで私見によるが、今もなおこれでよいと思っている。勿論、雨森信成にしても、今立吐醉にしても今後、新しい資料が出て、より広範な舞台でその面目を躍如させたい思いは尽きない。

今回、瓜生 寅を敢えて書くにあたって、この人物もまた屈折した心の軌跡を辿った生涯の人であるだけに、容易ではなく、この稿ではひとまず瓜生 寅の血気盛りの明治五年あたり、寅の三十歳頃までを一区切りにして、その内容については、これからの論考によって追々ご理解を願うことにする。

そこで始めにグリフィスが病気の瓜生を見舞った東京日記の一部を紹介する。おそらく両者のこれが初対面であろう。明治四年一月十八日によると、開成所教師の瓜生氏の病氣見舞に肥前の某氏と出かけて行った。瓜生の病氣は大したことはなくグリフィスはこの見

舞いは楽しかったという。同年二月十二日にはフルベッキ夫妻と大学南校の病気の教師、瓜生を見舞っている。開成所はすでに明治二年に大学南校と改称されて、明治三年、フルベッキは大学南校教頭、瓜生 寅は大学少博士に任ぜられていた。さらに日記によると、グリフィスは横浜上陸後、福井藩校新館に着任までの二カ月間を、横浜、東京で多くの人物と交際しているが、そのなかに外にも松平春嶽、イギリス公使パークスのように、瓜生の英学と深い繋りを持つ人物の名前が見られる。

ここにもう一つグリフィスの瓜生に言及した興味ある文章がある。それはグリフィスが帰国した明治八年（一八七五）に発表した論文 *The Recent Revolution in Japan* のなかで著述家として貢献した洋学者の一人として瓜生 寅を称えていた。この論文は明治十五年に『日本近世変革論』として上下二冊、原撰希利比士。訳述 牟田 豊で、奥付は翻訳出版人 東京麻布區飯倉片町十六番地寄留 牟田 豊で出版された。その牟田 豊の訳を借りて、グリフィスが瓜生に言及の箇所を引用

するとこうである。即ち、

箕作、加藤、西、内田、瓜生等ノ諸子皆各著述翻譯ノ大業ヲ成セリ余日本ニ客タル殆ト四年間交ヲ國中ノ英雄豪傑ニ結ヒ許多ノ實驗ヲ経テ後ニ熟思スルニ日本人ヲシテ其心思ヲ改メシメ今日開明ノ域ニ進入セシムル者ハ日本語ヲ以テ印行セル著書譯書ノ功甚タ多キニ居レリ是レ余カ所見ト雖モ自ら信シテ疑ハサル所ナリ

このグリフィスの論文は『The North American Review』に掲載されたもののちにグリフィスは『The Mikado's Empire』(一八七六年)に、これを削除、改訂、補足加筆して転載した。

瓜生が再びグリフィスと交わるのは、南校(大学南校改称)の教師になるグリフィスとの契約を取り交わすことになった時である。

日本語の条文のはじめに「大木文部卿町田文部大丞及ヒ南校長官瓜生正七位辻從七位日本政府二代リ米人ウリヤム、ギリフヒス君ト取結ヘル条約左ノ如シ」とあるように瓜生はこ

の時、文部省七等出仕兼南校の事務掛をしていた。契約書の日付が明治五年壬申正月元日とあるところから、陰曆明治五年二月九日のことで、実際は人々の生活はまだ陰曆で動いていた。条文第九条は「一何事ニ限ラス論判ニ及フ件々ハ都テフルベツキ君ト談判可致尤其決定ハ南校長官ノ許可ヲ持ツ可キ事」とあるが、グリフィスの雇いについては互に師弟の間柄にあつたフルベツキと瓜生 寅の参画するところであつたことは疑う余地がない。

それでは瓜生 寅の英学修業はどうであつたか。長崎での米人ウイリヤスとフルベツキ、横浜のイギリス公使パークス、英人ラウダーそしてグリフィスの名前が挙げられるが、なかでも、フルベツキとパークスに就いて西洋の文明思想と科学思想を学んだことは、瓜生をして英学を時代の要請に適うものにしたといえよう。

本論に入る前に次に瓜生 寅の本稿に関係のある年代の履歴からとくに英学に係る部分について述べることにする。

一 瓜生 寅の英学履歴

瓜生 寅は天保十三年(一八四二)壬寅正月十五日越前福井萬町に生れた。父は福井藩士多部五郎右衛門正晃 幼名寅作。安政三年六月寅作十四歳の時、父正晃は藩の御趣意方の不祥事件の責任者として処刑された。多部家は士族を剝奪され、財産を没収された。同年十二月、瓜生二寅と改名して京都に出た。以下瓜生 寅自筆の履歴からの抜書。

萬延元年庚申五月京ヲ発シ長崎ニ向フ同年七月長崎着

文久元年辛酉米人ウイリヤス及ヒフルベツキ両氏ニ就キ英学ヲ攻ム同年五月魯艦對州ヲ覬フヤ小杉右藤次ニ随ヒ黒瀬浦ニ赴ク二年壬戌三月ニ桅風帆船君澤形ヲ江戸ニ廻航ス

同年九月幕府始テ英学校ヲ長崎江戸町ニ開ク擇シテ教授トナル三年癸亥二月私塾ヲ開ク藝薩二筑ノ藩候ヨリ生徒数名ヲ托セラル同年十月帰省十一月弟雷吉ヲ携へ出郷十二月廿四日長崎着

元治元年甲子十二月廿日左近衛権少将兼越前守松平茂昭公豊前小倉ニ召シテ原籍ニ復

シ士席ニ列セラレ

慶応元年乙丑正月公ニ小倉行宮ニ謁シ恩命ヲ拜ス同年六月英軍艦ニ乗シ長州ニ赴ク同年八月帰省十月再ヒ長崎ニ出ツ

二年丙寅二月英公使ニ従ヒ英軍艦ニテ横浜ニ入ル幕吏ノ疑フ所トナル三月長崎ニ帰ル同年四月帰国ノ命アリ帰郷禁ヲ侵シ外艦ニ在リシヲ以テ幽閉セラル同年六月禁解ケ藩候ノ別墅ニ英学校ヲ開ク時ニ命アリ召レテ春岳老公ノ咨問を受ク

三年丁卯二月老候京ニ在リ召サレテ京邸ニ侍ス同年五月私塾ヲ鳩門ニ開ク同年八月兵学所詰ヲ命セラル同年十月命ヲ受ケ横浜英軍兵營ニ就キ兵事ヲ研究ス十二月徳川氏職ヲ解ク英公使大阪ニ之ク乃チ英艦ニテ大阪ニ入り京師ニ復命ス

明治元年戊辰正月命アリ帰国七月再ヒ出京外国官御用掛ヲ拜命ス故アリ辞シテ就カズ同二年己巳七月本城ヲ以テ文武校トス乃チ文学教授兼武学佐教ヲ命セラル

明治三年庚午三月徴サレ四月五日大学大助教ニ任シ八月從七位ニ叙セラル十二月十五日大学少博士ニ任シ正七位ニ叙セラル同年

十月廿二日東京府へ管轄ヲ移ス

四年辛未正月七日大阪理学校長ヲ命セラル七月十三日帰東京ヲ命セラル廿七日文部少教授ニ任セラレ編輯局ニ入り著述ニ従事ス此間学制改革ノ議ヲ建ツ九月廿三日日本官ヲ免シ廿四日改テ文部少教授ニ任シ大学南校教場掛ヲ命セラル是ヨリ教育ノ革新ニ従事ス十一月十四日兼南校事務掛ヲ命セラル十二月九日日本官ヲ免シ文部省七等出任ニ補セラレ南校ト本省ヲ兼務ス以来学制教則新設ニ従事ス

五年壬申正月五日東南洋学一二校御雇外国教師へ新年祝酒被賜ニ付接伴掛命セラル十一月舞樂ニ御招ニ付接伴掛命セラル学制既ニ發布教則己ニ成シ故アリ文部ヲ辞ス八月九日大蔵省五等出仕ニ補セラル

これはあくまでも履歴であつて自伝ではないので「故アリ辞シテ就カズ」「故アリ文部ヲ辞ス」のように如何なる理由があつて辞退したのか不明だが、しかし興味のある個所である。ここで多少説明を必要とする個所の一つに弟雷吉(改名して震)がある。嘉永六年(一

八五三)生れ。長崎で英学修業、明治四年工

部省鉄道寮に出仕し、同年十二月遣欧米特命全権大使岩倉使節団に鉄道中属の身分で随行。明治五年工部省派遣の留学生となりロンドン・ユニバーシティ・カレッジに入學、在留三年帰朝、再び鉄道寮の職に従事し明治十年官職を辞す。岩倉使節団の帰朝は明治六年九月のことだから、瓜生は使節団のイギリス回覽の明治五年七月以降に何かの命を受けて団を離れて留学生になつたと推察される。実業家として名を遂げ、大正九年(一九二〇)歿す。享年六十七歳。

元治元年、越前守松平茂昭公豊前小倉ニ召シテ「云々は福井藩主松平茂昭が幕府の第一次長州征討副総督として小倉に駐在した時、瓜生は藩主に呼出されて士分に復するといひ渡されたことをいう。

次に明治五年、初めて全国の戸籍調査を実施したいとゆる壬申戸籍から瓜生三寅の戸籍の全文を転載したい。

元治元子十一月十一日御国居住被差免候
一同年十二月廿日英学厚心懸候ニ付右為修

行扶持三人扶持被下置候

慶応元丑九月十四日其身一代被召出五人
ふち被下置英学方被仰付御用人支配ニ被
仰付候 但是迄被下候修行ふち三人扶持
之儀も其俣下置候

一同月廿九日長崎表江出立四月九日帰

一同二寅四月廿五日昨午出崎被仰付候節御
含通りも有之処不都合之次第有之趣不調
法之事ニ候依之遠慮被仰付候急度相慎可
罷在候且又当分他国出之儀御差留被成候
五月十一日御免

一同年六月七日英学取調方兼兵学所へ罷出
候様且又大砲小銃等之儀ハ砲術所役輩江
も申談候様被仰付候

一同年八月廿九日英学致世話候訳も有之ニ
付当分御泉水御建物之内御貸被成候

一同三卯二月四日英学教授方被仰付右勤中
御足五人扶持被下置候

但御足扶持被下置候ニ付是迄修行中被
下候三人ふち之儀ハ以後不被下候

一同年四月六日御用有之ニ付上京被仰付同
十三日出立 五月廿日帰

一同年六月十六日は迄山脇元恭罷在家屋敷

当分英学所ニ被仰付御預被成候

但同所江建継之上航海術修行之面々集会
所ニ被仰付

一同年十月朔日取調御用有之ニ付江戸表江
罷出候様被仰付同八日出立

但一日金老歩ツ、被下外ニ一ヶ月五兩
ツ、為御手当被下置候

一同年十二月十一日先達而江戸へ出立夫
京江罷越候処帰

一同四辰六月十二日御用有之上京被仰付候
十六日出立九月四日帰

一同明治ト改元十月廿二日以来御目付支配ニ
被仰付

一同明治二己二月廿七日御足月俸三口被下月
給米十俵被下

但是迄御足五口以後不被下候

一同年三月朔日学校附属被仰付

一同年六月廿一日兵学教授方兼被仰付候事

一同年七月四日三寅事^{ウイン}三寅^{ミト}ト改
一同月八日は迄罷在候洋学所外塾ニ御取建
西村閑吾へ御預ケ被成候

一同年十一月廿八日武学所佐教被仰付候
一同三年三月八日今般奏任官江御登用相成

候間至急上京可申付旨ニ付八月廿一日東
京江出立

一同年四月四日被任大助教

一同月九日叙従七位右宣下候事

一同年五月二日東京江家族引寄申度願之通
被仰付旅費之儀ハ從朝廷頂戴之事

一同年十二月十五日任少博士宣下之事

一同日叙正七位宣下之事

一同四未六月廿二日其身一代之名日被指除
候事

一同年十月廿二日東京府貫属編入之事

元治元年(一八四〇)、瓜生寅作(二十二歳)

が英学の実力を認められて三人扶持の士分に
登用されたが、その分限は一代限りであった。

そして「其身一代」が解除されたのはようや
く明治四年、瓜生 寅二十九歳の時で、その

年に瓜生は東京へ戸籍を移した。同じ年にグ
リフィスは東京で一歳年上の瓜生を病床に見

舞っているが、グリフィスの教える福井の藩
校明新館には十三歳の雨森信成(旧姓松原)

と十六歳の今立吐醉が学んでいた。もし家禄
を失っていなければ瓜生の弟震も明新館で雨

森や今立と机を並べてグリフィスに習っていたかも知れない。しかし早晩、明治政府のもとでは長崎でフルベッキに習った瓜生が、福井にも同じ英学を導入し、時代の要請に応えようとした試みも頓挫せざるを得なかった。

明治五年の新しい学制の始まりである。しかも皮肉なことにこの学制の政策立案に南校教頭フルベッキと文部少教授兼南校事務掛の瓜生が中心になって参与していた。そして学制発布後、瓜生は文部省を辞めている。こうなつた事情を知るために英学教師瓜生 寅の仕事を取り返つて見よう。

二 英学教師瓜生三寅

前述の履歴と戸籍から瓜生の教職の個所を抜き出して見る。但し(履)は履歴、(戸)は戸籍を表す。

文久二年(一八六三) 九月幕府始テ英学校ヲ長崎江戸町ニ開ク擇シテ教授トナル (履)

文久三年(一八六三) 癸亥二月私塾を開ク藝薩ニ筑ノ藩候ヨリ生徒数名ヲ托セラル (履)

慶応二年(一八六六)

六月禁解ケ藩候ノ別墅ニ英学校ヲ開ク時ニ命アリ召サレテ春岳老公ノ咨問ヲ受ク (履)

八月廿九日英学致世話候

詔も有之ニ付当分御泉水御建物之内御賃被成候(戸)

慶応三年(一八六七)

丁卯二月老候京ニ在リ召サレテ京邸ニ待ス同年五月私塾ヲ鳩門ニ開ク (履)

卯二月四日英学教授方被仰付 (戸)

六月十六日は迄山脇元恭罷在家屋敷当分英学所ニ被仰付御預被成候(戸)

己巳七月本城ヲ以テ文武校トス乃チ文学教授兼武学佐教ヲ命セラル(履)

六月廿一日兵学教授方兼被仰付候事 (戸)

十一月廿八日武学所佐教

被仰付候

(戸)

瓜生が明治三年(一八七〇)、大学別当の松平春嶽によって大学南校助教に登用されるに至るまでには、長崎と福井の英学校と私塾での雌伏八年を要した。

その私塾であるが、長崎は培社と称して前島密(一八三五一—一九一九、日本の郵便事業の創始者)が発起人となつて、瓜生三寅に学

長を依頼して開いた塾であつた。前島による「当時遊学生中、資力足らずして困難を感じる者鮮からざるを聞き、彼等の為に少費の合宿所を設け、互に相救ふの急なるを思ひ、

瓜生寅氏に其所長と学長とを依頼し、何先生には其所以を談じ、明諾を得て培社と称する学舎を開設せり。培社は禅宗某寺の空堂を借りて之を用ひ、一僕を雇入れて炊事に当らしめ、余は社の財政に任ずべしと定めたり、然

るに斯の如き義社に於ては、収支相償はざるは蓋し皆然らん。況んや一つ寄附無く、赤貧の余がその財政に当るに於てをや。故に開設後数日ならずして、余は私物を売却して米商

に払いの悲境を現せり。」といった有様であつた。前島は培社の運営を瓜生独りに任ずに当

つて、瓜生に筑前藩の翻譯の仕事の世話をして、その収入の半額を培社の財政の助けにするよう約束していた。ところが不謹慎にもその金をなじみの芸妓に与えていたこともあって、培社は閉鎖の止むなきに至った。「余は培社の将来を按ずるに、瓜生氏の独腕を以て之を全治するの難きは明かなれば、二三の者には別按を口授して、同社の閉鎖も傍觀せしめたり。瓜生寅氏は越前藩の浪士なりしが、文学の材に富み、著書及訳書あり。復籍の後は富有の人となれり、余は彼が復籍に就ては、大に斡旋をする所あり、而して終生の交を全うせり。」

福井の瓜生三寅塾は慶応三年、鳩門という所で開かれた。『福井城下ものがたり』には鳩ノ門（中央二丁目）、鳩ノ御門のあったところ。藩祖秀康の頃、この門の附近に養父結城晴朝はるあきの屋敷があった。鳩（ハト）は「ハルトモ」がなまったものといわれていると書いてある。瓜生三寅塾に学ぶ者の名前は福井県立図書館所蔵の「土族・子弟輩・新番格以下」の履歴台帳で見ると限りでは佐久間正、稻生震也、雨森別、小野文哉、山岡次郎、明石源蔵

であった。

十四歳で郷関を出なければならなかった瓜生少年がようやく英学者としての名声を得て士分に復籍し、福井に英学校を開くまでになった。瓜生三寅二十四歳であった。この時、瓜生は初めて春嶽に招かれて相談を受けるといふ晴れの舞台に登場した。春嶽からは英学校を教えることに尽力するよう請われ、春嶽の御泉水の下屋敷内が英学校（又は英学校）に貸し与えられた。

翌慶応三年、瓜生は藩校明道館の英学教授に任命されて、御泉水から山脇元恭の家敷に移された英学所に勤める。明治二ごろから全国各地で新しい学校の設立が活発になり、福井に於ても明道館が明新館と改称されて、新しい学制を置いた。瓜生の履歴に言う「本城ヲ以テ文武校トス乃チ文学教授兼武学佐教ヲ命セラル」は、戸籍によると兵学教授を兼ねることになり、その後、武学所佐教に任命されたことを指す。明新館の学制は外塾、小学校、中学校の三制を設け、中学校は十七歳から試験によって入り、二十歳までに三級の課業を終えることを義務づけている。学舎は

本丸（本城）にあった。

英学所、兵学所のいずれもこの時代の士族の子弟に向学心を抱かせる所であった。福井藩士松原十郎義成の長男、秀成（幼名、平当年十五歳）も明治二年、沼津兵学校に藩費留学している。英学といひ兵学といひ他の外国語より優勢な英語を手段にする西洋知識の習得に外ならない。瓜生の英語が頼みとされたわけである。瓜生三寅が英語で何を如何に教えたかはその多くの訳述書からも察することが出来るが、そのことについて瓜生の英学教師フルベッキとその英学を活用して英式兵学を知ろうと接近して行った英公使パークスの二人を相手の瓜生の英学修行を振り返ってみたい。

三 英学教師フルベッキ

瓜生が十八歳で長崎へ遊学した万延元年は大老伊井直弼が桜田門外で水戸浪士らの凶刃にたおれるという事件のあった年であった。翌文久二年、瓜生はウィルリアスとフルベッキという二人の米国人に付いて英語を学ぶがウィルリアスはチャニング・ムーア・ウィリ

アムズ（一八二九—一九〇八）という聖公会の宣教師であった。しかし英学生として正式に英語を習ったのはフルベッキからであった。この年は七名の英学生がいて、その内三名は幕府の長崎通詞で残りは英学研究の目的で他の藩から派遣されたり、自発的にやって来た役人が学生であった。英学生を教えることはかなり貴重な時間をとるのでその数を極力押さえてのことだったようだ。瓜生がこの七名の内の一人である確かな記録はないが、瓜生自身の証言と英学者としての瓜生の仕事フルベッキの意向に即していることからその一人と思われる。授業では英語の上達した学生には漢文と英文の聖書を与えて比較対照の研究をさせているが、キリスト教に関心を向けさせようとの考えもあった。またミッシェンの出版部で刊行している初級と第一リーダールを読ませている。

履歴によると文久二年、瓜生は長崎江戸町に開校の幕府最初の英学校の教師になった。この英学校は安政五年に開設の長崎英語伝習所の流れを汲み、文久三年に江戸町に設置された洋学所であり、また日本で最初の官立の

英学校であった。学頭は幕府の唐通詞、何礼之助と平井義十郎が任命され、十二人の教師がいたといわれる。フルベッキがこの学校の英語教授に就任したのは元治元年のことで、すでに長崎奉行が江戸表に行った時、これを幕府に上申し許可を得ていた。瓜生はこの十二人の教師の一人と思われるが、履歴と英語学校設置の年代に一年のズレが気になるころである。

文久三年の瓜生は英学塾培社を任せられていたり、弟の雷吉を福井から連れてきて、おそらく長崎洋学所で学ばせているなど、瓜生の身辺は多事であるが、足掛け三年のフルベッキに就いての英学修業が瓜生の英語に長足の進歩を与えたことは否定できない。長崎のフルベッキについては、何よりも最も近い存在の一人であったグリフィスが著した『日本のフルベッキ』という伝記に俟つところが大きいので、瓜生の長崎について参考になる部分を訳出したい。

フルベッキ氏の自宅外での最初の青年教育は、長崎奉行が通訳者養成のために設置

した学校に始った。中国から戻ると、フルベッキ氏が一八六〇年に英語を教えたことのある二人の青年が二度も昇進していた。帰りをよるこんだ学生たちはフルベッキ先生に感謝の気持を表すために黒豚の仔二匹を贈った。学生たちは外国人は特に豚肉が好きだとの考えからである。長崎奉行はこの青年たちの英学の成果をそこに見て満足し、江戸へ出た際、幕府に外国語と科学の学校を創設して、フルベッキ氏をその校長にしてほしいと申し出た。やがて米国領事を通じてそれが正式に適用されて、フルベッキ氏は最初は毎週五日、一日二時間を教えることに同意して、長崎の学校の校長の職を受け入れた。俸給は年千二百ドルであった。幸い日本のためにもまた真のキリスト教促進のためにもなることなので、ニューヨークの海外伝道局は、日本の将来有望な青年のために影響を与えるこの機会を快諾した。この時以来、一八七八年までフルベッキ氏は自立の宣教師であった。校舎が建てられたが、間もなく百名を越す生徒で溢れるほどであった。フルベッキ氏は上級

のみ受け持った。

この豚の仔のプレゼントがフルベッキの長崎洋学校創立のきっかけになったというエピソードは少し説明がある。文久三年五月、フルベッキとその家族は上海に避難する。生麦事件により薩英戦争の風説、長崎に伝わり外国領事、戦禍長崎に及ぶと通告、四月出島ケンペル邸に避難す。五月上海に避難。」(高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』年譜より)グリフィスによると、英国と薩摩藩、幕府と長州藩の間の紛争がこみいってくると、長崎などの港の外国人が虐殺されるかのように思えたという。時に綾部 恭が兄の佐賀藩家老村田若狭からの伝言をもって来て、フルベッキ氏にその身と家族が危険なので一所懸命に逃げるよう警告したと言う。フルベッキ一家が同年十月十三日に長崎に帰って来た時、その帰りを待っていたフルベッキの学生たちが先生のよろこぶものと考えて、豚の仔を持って歓迎したのであった。この光景が長崎奉行をして初めてフルベッキを校長とする英学所の創設の発想に向わしたのである。これには

フルベッキの人柄が大いに左右したと思われる。最後にグリフィスによるフルベッキの人物評を紹介する。

ギドー、フルベッキという人は多くの面を持つていた。その知能と精神の遺伝は偉大であった。技師、教師、数カ国語に通じた人、牧師、教育者、政治家、宣教師、翻訳者、学者、紳士、世慣れた人、同時代とあらゆる時代の子であった。フルベッキに絶大な信頼と尊敬を持つ日本人のなかには貴顕紳士や習慣や意見について依然として全く保守的な者がいた。このなかには頑迷固陋な仏教信者や神道信者がいて、フルベッキが不屈のキリスト教宣教師であると知りながらも、常にフルベッキを紳士として尊敬し、信頼した。

日本の政局の渦中にも身を置かざるを得なかったフルベッキだが、それについてグリフィスがこんな一例を語った。普仏戦争(一八七〇年)の時、横浜にドイツ軍艦ヘルサ号が逃げ込んできた。フランスは親幕政策以来、

明治維新後も日仏協力の路線は敷かれていたので、明治政府にドイツ軍艦の退去命令を要求し、他方、ドイツ軍艦に向かって五時間以内に横浜港を出なければ発砲すると通告した。時の外務卿、岩倉具視は日本政府のとるべき態度をフルベッキに問うたところ、一冊の国際法の本を持ち出して答えた。中立国の港で交戦国が戦争をすることは出来ない。ドイツ軍艦は二十四時間以内に港を撤退しなければならぬ。しかも日本の海岸の三リーグ内での戦争は許されないと説明し、日本はフランスの要求に従う必要もなく、ドイツに対して戦端を開く必要もないと忠告した。

この一冊の国際法の本というのが *Elements of International Law* であった。これは、米人ヘンリー・ホイートン (Henry Wheaton 一七八五—一八四八) によって一八三八年にフィラデルフィアとロンドンで出版された。これの漢訳『万国公法』(一八六四年、米人宣教師 W・マーチン) が最初に日本に伝わって、慶応元年(一八六五)に開成所が翻刻した。その後、原書は版を重ねて、一八五五年には W・B・ローレンスの注解付で

第六版、一八六六年にはR・H・ダナ編が出版された。このローレンス注の英語から初めて訳したのが瓜生三寅である。福井市立図書館の明道館旧蔵の英書にローレンス注の一八六三年版がある。因に金沢泉丘高等学校は加賀藩内蔵のダナ編（一八六六年）版を所蔵する。

越州瓜生三寅先生訳述の『交道起源 一名万国公法全書』は明治元年（一八六八）、京都の竹苞樓から出版された。瓜生が英学教授として福井の英学所と塾で教えていた時、明道館のローレンス注の一八六三年版を手に翻訳を始めたと思われる。交道起源なる書名は瓜生の創意であった。塾生の山岡次郎が手伝っている。瓜生がこの翻訳を手懸けるに至るにはフルベッキから何らかの勧奨があったと思われるのは、フルベッキ自身がニューヨークのフェリス師に手紙（一八六八年十二月十八日付）で書籍の注文を依頼したなかにダナ編の原書を三冊入れていることもあって、この書の日本に於ける需要の価値を知っていたからである。他方、瓜生はこの訳業をもって将来の仕事の試金石と考えただろう。

山下 瓜生 寅の英学

それにしてもホイートンの原書の大冊に比べて、瓜生の『交道起源』は実際に翻訳とは言い難いものであり、訳述のことばの示めす解説の類であった。しかしここに問題がある。それは福井県立図書館に収めてある松平文庫の中の瓜生の『交道起源 卷之一』の原稿である。その出だしはこうである。

交道起源第一部卷之一

米利堅公使 顯理 惠頓選

米利堅 維廉 老連斯補入

大日本越州 六合魁民 瓜生三寅 口訳

門人 山岡次郎太 筆受

○ 交道の名義本源大旨

○ 第一章 交道の名義本源

これが瓜生の本領であったが惜しむらくは日の目を見ることが無かったのである。尾佐竹猛がこの訳書で「公道」「交道」といった瓜生の新しい訳語に敬意を表しているのはせめてもの慰めである。五箇条の御誓文の一つ「旧

来ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ」の公道がそうである。

明治五年、瓜生 寅は『啓蒙智慧乃環』和三冊木版を東京芝大神宮前和泉屋吉兵衛から出版した。これには異版があつて、寅の別号の一つ、於菟子訳述となつていたり、瓜生寅の写真（凸板）入りや写真無しもあつた。

この原本は『智環啓蒙熟課初歩』といつて、英人宣教師で中国学者のJ・レグ（一八一五—一九七）が中国人生徒のため、英語の初等読本を中国語訳し、英中対照印刷して、一八五六年（安政三）香港から出版した。英語学習用としてだけでなく西洋新知識の入門書であり、小百科辞典の感があるが、宣教師の選んだ読本だけあつてキリスト教的立場から書かれてある。瓜生の訳はこの一八六四年発行の訂正増補版によつた。瓜生の外に『智環啓蒙』の日本版は相当あつた。がその違いは第百九十二課から最後の二百課までは耶蘇教のことが書いてあるが、瓜生版はこの部分を全部削除してあることだ。絵がはいつていたり、原本にない課があつたり、翻訳というよりむしろ日本向きに改作されていた。

瓜生版の全二十三篇の項目を書き出してみ
る(ふりがな省略)。第一篇 総論。第二篇
身体論。第三篇 飲食論。第四篇 服飾
の論。第五篇 居所の論。第六篇 教育の論。
第七篇 乳養動物の論。第八篇 鳥の論。第
九篇 爬虫と魚との論。第十篇 蟲類蚓類の
論。第十一篇 植物論。第十二篇 地の論。
第十三篇 物の体質の論。第十四篇 空気諸
天の論。第十五篇 時節の論。第十六篇 地
球寒暑道を分つ等の論。第十七篇 人間交際
の論。第十八篇 国政論。第十九篇 列国の
論。第二十篇 通商交易の論。第二十一篇
物の質及び其動き等の論。第二十二篇 機械
力の論。第二十三篇 五官の論。

最後の第二十四篇は『智環啓蒙和解』(石川
県学校蔵版、明治六年)によると「上帝体用
ノ論」で、「上帝ハ万物ヲ造レリ」のキリス
ト教の天地創造に始り、唯一神としての上帝
を説明している。『万国公法』のマーチンも『智
環啓蒙』のレッジとともに宣教師として中国
にあって、西洋の思想や知識を中国語に訳し
て普及しようとした。それが日本に輸入され
て来た。それがまた漢学を修めた瓜生のように

な知識階級には手っ取り早い西洋知識吸収の
手段であった。加えて瓜生は長崎で二人の米
人宣教師から個人的に英学を修業していた。
明治三年、フルベッキと瓜生とともに大学南
校の要職についていて、翌年は学制改革の仕
事に従事する。瓜生の『啓蒙知意乃環』が明
治五年の新学制の下で、「天下小学生徒佐開知
發蒙」(瓜生の同書の文部少丞の題首を目的
に出版されたことは明白である。となれば第
二十四篇の削除は已むを得なかった。因に切
支丹禁制の高札の撤廃は明治六年である。た
だ長崎のフルベッキから耶蘇教の知識を受け
ていた瓜生 寅としてはこれは皮肉な結果と
ならざるを得なかった。

四 兵学教授 瓜生 寅

瓜生三寅訳稿 英之海軍用『演習軌範』乾
と書かれた表紙の和綴の一冊が福井市立図書
館にある。甲子冬十月 東陵山人瓜生寅三寅
誌于 崎陽客舎と凡例の後にあるところか
ら元治元年(一八六四)、瓜生自筆の原稿であ
る。凡例によってこの原稿の内容が知れると
ころを記すと、この原本は英国海軍局士官が

備えているもので、崎陽鎮台の長州藩士服部
某の依頼で訳すことになったが、意味の判然
としない所は英士官に質問したという。かつ
て京都の蘭医新宮涼閣の医学塾(涼閣の父、
涼庭が天保十年京都南禅寺のほとりに開いた
総合学園順正書院)で蘭語を学んだ瓜生だけ
に、この最初の英書翻訳に蘭語の素養が役立
った。それでも瓜生は自らの非才を詫びて次
のように述べていて、その翻訳態度は好感が
もてる。

然も寅固ヨリ文墨ノ士ニアラズ寅ガ意彼ガ
所長ヲ採テ我が所短ヲ補フニ急ニメ文辞錦
繡ヲ飾ルニ違アキ及バザレバ唯ダ原書ノ本
意ヲ翻スルヲノミ是レ務メリ読者辞ヲ以テ
意ヲ害セズンバ幸甚

この年、瓜生は豊前小倉に於て、福井藩主
松平茂昭から復籍の許しがあつて 士分に加
えられた。京都では長州藩兵と会津薩摩兵が
交戦して、長州側が敗れ禁門の変、萩藩追
討の朝命で第一次征長の役、英米仏蘭連合艦
隊の下関萩藩砲台破壊と長州征伐が続く。瓜

生は『演習軌範』の次に英式歩操について詳説した書物の訳に取り掛った。これも福井市立図書館所蔵の①瓜生三寅訳『英式歩操新書 軽兵部』巻之七と②越州瓜生三寅訳述『歩操新書増補』生兵篇、小隊篇、元込旋條銃上下、大隊篇上下の六篇である。①は一八六五年(慶応元)出版の慶応三年、南越兵学所蔵版であり、②は慶応四年、京都竹苞樓出版であった。瓜生の『英式歩操新書』は春嶽の知るところとなり、慶応二年の書簡のひとつによると、

昨年正月も今年七月迄、追々御写し被仰付候新聞紙類第幾号御目録斗りにてよろしく、一寸拝見いたし度候、瓜生三寅於小倉表差出候由、射炮式等ミニ銃・散兵演式手続翻訳いたし候由、何冊有之、当時いつ方に有之候哉、吟味可被申越候、已上

慶永

『演習軌範』と『英式歩操新書』の翻訳は瓜生が英国海軍士官を知り、英軍艦に乗船できる機会をもたらした。とくに慶応二年には英公使パークスに従って英軍艦に乗って横浜

山下 瓜生 寅の英学

に入っている。通訳のようなことをしたのかも知れないが、幕府の役人に疑いをかけられて、いったん長崎に帰った後、福井藩にて幽閉された。瓜生の戸籍にいう「御含通りも有之処不都合之次第有之趣不調法事ニ候依之遠慮被仰付候急度相慎可罷在候且又当分他国出之儀御差留被成候」の事である。これが約一カ月で解禁になるや、英学取調方兼兵学所への出向の身となり、大砲小銃等について炮術所の相談役にも任せられた。翌三年には京都守護職の春嶽に京都の屋敷へ招かれていて、瓜生は春嶽の命を奉ずる立場になってくる。

て饗し置申候、成程難儀之趣ナリ、ミニステルパークス妻も同伴逢申候、後宮奥方等逢度旨パークス申出候得共、何分拙藩未だ中々開ケ不申候ゆへ、議論相立相断り申候、城中へ入レ体面モ六ヶ敷、礮館と申別館にて体面いたし置申候、宇和島にて八女の給仕と申事に、却而彼之満悦ハ拙藩ハハ宇和島の方ニあるへし

慶応三年十月一日の「取調御用有之ニ付江戸表江罷出候様被仰付同八日出立」とあるのは、履歴の「同年十月命ヲ受ケ横浜英軍兵営ニ就キ兵事ヲ研究ス」のことで、航海術修業も含まれていた。春嶽と英公使パークスについては、春嶽の慶応三年登京日記にもパークスはたび／＼登場する。

といった感想がある一方、「外国之陸軍訓練ハまたもまね出来候へとも、海軍にいたりてハ感服実ニ戰場之とふり之形勢」の迫真の訓練に驚嘆している。春嶽はまたパークスの仕事を一つは日本の開港督促と一つは真の大君を幕府と見るか朝廷と見るかにあると見ている。慶応四年(一八六八)五月二十二日(閏四月一日)、英公使パークスは大阪東本願寺掛所で信任状を天皇に提出したが、これが外国の新政府承認の初めであった。これも春嶽は「先日英ノ公使パークス於坂城謁見有之、上様御応接有之候節公使パークス申候ハ、積年幕府之事を疑惑仕居、今日謁見にて万事氷解仕申候」と日記に書く。

兵事研究のため横浜にいた瓜生は春嶽の命を受けて、「十二月徳川氏職ヲ解ク英公使大阪ニ之ク乃チ英艦ニテ大阪ニ入り京師ニ復命ス」と履歴にあるように、瓜生は大政奉還の前にパークスと大阪入りして、早速、京都の春嶽におそらく横浜の英軍兵営での研究の成果とパークスの動静について報告していた。春嶽にとつてすでに瓜生は信望のある必要な人物になっていた。

五 学制頒布と瓜生氏『日本國盡』

福井藩は明治三年、四年とあいづいで藩校明新館へお雇い外国人教師を招聘して、英人ルセーから英語、米人グリフィスから化学と物理を学ばせた。外国人教師を雇ったのは将来を見通した改革者（グリフィス評）春嶽の見識であった。これは春嶽の目指す富国強兵策の一環として、とくに教育に関する根本問題であった。このために福井藩は他藩に先駆けてポリテクニカルスクール（工芸専門学校）建設の人材を外国に求めることになった。幸

い、春嶽にはこのことで信頼できる英学者瓜生 寅がいた。そして瓜生からフルベッキへ

と春嶽の意思が伝えられて、米国からグリフィス招聘になった。

一方、瓜生は明治三年「今般奏任官江御登用相成候間至急上京可申付旨三付八月廿一日東京江出立」（戸籍になり、家族を上京させて、東京府に籍を移す（東京府貴属編入については履歴は明治三年、戸籍は明治四年の相違がある）。明治政府からの召喚である。明治四年、文部少教授瓜生は編輯局に入り「著述に従事ス此間学制改革ノ議ヲ建ツ」ことになり。著述は文部省刊行の翻訳書で大学の教科書として使用された。学制改革の瓜生は文部省任命の学制取調掛十二人（主任、箕作麟祥）の中の有力なメンバーであった。瓜生は生涯に亘って、漢詩によって折り／＼の感慨を綴って残しているが、ここに学制制定の仕事に任ぜられた時の瓜生の漢詩がある。

辛未 明治四年 三十（歳）

奉命立学制 定教則 兼管理南校 肇

革校規 退而賦二首

遙々數百載 戰国存余習 幕府興国学
專為民上級 中興日猶淺 依然猶因襲

所以學問事 高尚只是執 虛文無實用
民庶不欲入 教之非其道 適以破素業
國家布教化 宣其普及 家無不學子
國無不學區 如斯能事畢 列國可並立
聖明今在上 德化萬民協 爰命立學制
教則亦可踏 盛哉文明運 伏竜破其蟄

國家無常經 綱紀紊難理 三軍欠常經
韜略不足時 常經謂之正 反之是變耳
捨正專取變 吾不知其美 開成自興養
變則為學軌 所學無頭緒 万里失尺咫
建議就正則 陶汰去其秕 變則為別科
晚學有所倚 法理文三學 鼎足無觸抵
所擇由性近 必要慎千始 學術有淵源
當以固根抵 而期之他日 濟々出多士
歐洲稱文明 並驚可無恥 持之臨天下
橫行可万里 開成校即今南校

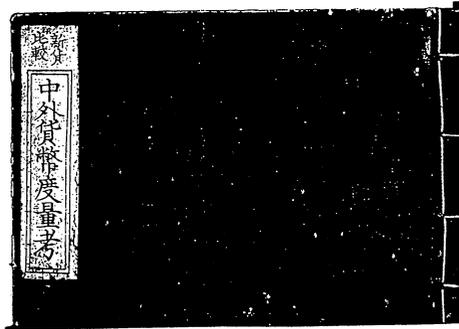
太政官布告の学制被仰出書（明治五年八月二日）にあつて人口に膾炙してあまりにも有名であつた「必ス邑ニ不學ノ戸ナク家に不學ノ人ナカラシメン」の基本精神が、すでに瓜生の「家無不學子國無不學區」に見られるで

瓜生先生之像

山下
瓜生
寅の英学



瓜生氏日本國畫



(瓜生三寅『中外貨幣度量考』明治元年 京都竹包樓 和裝61丁 11×15.5cm)



はないか。しかも瓜生はかかる学問の目標は「列国可並立……盛哉文明運」、「欧州称文明並驚可無恥」とあるように、西洋文明に堂々と伍して行ける日本になることを切望している。おそらく、瓜生のこの気構えが明治政府の全体に横溢していた。しかし布告にはその目的を「サレハ学問ハ身ヲ立ルノ財本共云へキ者ニシテ人タルモノ誰カ学ハスシテ可ナラシヤ」と謳っているに過ぎないのは、種々な異論をおもんばかつてのことであろう。

学制発布は明治五年九月であったが、折しも遺欧米特命全權使節団が欧米歴訪の途上のことであつて、文部省の方針が拙速であるとの憾があつた。瓜生の身辺に履歷の「学制既ニ発布教則己ニ成シ故アル文部ヲ辞ス」とあるような事情が生じていた。これもまた漢詩で見て行きたい。

自歎 時余將退
文部省

憶昨始興家 所學簡与質 家期適日用
室無曳裾匹 漁童与樵青 操伉皆真率
綽々有餘裕 衆務無疎失 喉過熱易忘
時去操乃佚 激戲加交友 虚飾營華室

食客來仰蔭 奴婢森成列 員冗日生事
文繁日逐未 執務無責任 操作無規律
怨嗟時到耳 費多事却室 經綸負初心
慘愴忍往日 思之夜不眠 簾鈞懸落日
八月九日退文部入大藏

これによると瓜生は発布を待たずして文部省を辞職して大蔵省入りをしている。しかし瓜生の履歷には既に発布とあり、食い違ひがあるが、いずれにしても国家再建のために学制の仕事に傾注してきて、初心を忘れた有様が目についてくと完成の暁には身を退く決心をしていたと思われる。「怨嗟時到耳」がどんなことか分らないが、瓜生の耳に恨みがましい陰口が入ってくるのが何とも辛くて嫌気が差したのであろう。「自歎」とはそれも他人の所為にするのでなく、自責の念に駆られての言葉である。だから夜も眠れなかつたのである。自助独立の精神の人、不羈奔放の人であるが、反面、気持の繊細な人であつた。

瓜生氏『日本國盡』は『啓蒙智恵乃環』と同じ明治五年に出版されたが、後者が新しい学制の下で子供に西洋の知識を教えるのが目

的ならば、前者は新生日本の地理を学ばずのが目的であつた。しかも福沢諭吉の『世界國盡』（全六冊、明治二年）の人氣を意識に置いての著述であり、先ず日本の地理を学んで暗記し、後で福沢の本を学べば世界の地理の概略がよくわかるという考えに基づいていた。

瓜生のこのいわば両方の啓蒙書は版を重ね、改正版もあるところからよく読まれたと考えられる。明治六年森有礼の発起により明六社が結成された。西周、福沢諭吉、加藤弘之、西村茂樹といった洋学者が主要メンバーとなり、「明六雜誌」を發行して欧米思想を鼓吹した。グリフィスも明六社の通信員であつた。他方、瓜生は文部省を辞職した時、英学者の仕事は終わりを告げていた。その後も訳述書の出版はあるが、フルベッキ、パークス、春嶽といった人物が画策する搖籃期の渦中にいて活躍する時代は過ぎ去つたのである。

あとがき

思えば筆者が瓜生 寅に興味を持ったのは十数年も前のことで、福井のグリフィスについて書く準備をしている頃であつた。当時、

福井県立図書館に勤務しておられた舟沢茂樹氏を煩わせて、県立、及び福井の市立図書館に瓜生の訳述書を見る便宜を受けたり、戸籍を読んでいただいたり大へんお世話になった。

おかげで『グリフィスと福井』のなかに瓜生寅の一章を書くことができた。またその頃、

武生市立図書館所蔵の高島 正『聖諭の起草者学制の立案者 瓜生梅村翁』(写本)にも出会った。その後、多数ある瓜生の訳述書を機会あるごとに手にしてきて、英学者瓜生について本格的に書きたい気持ちに駆られて出来たのがこの草稿である。折しも写本『梅村枯葉集』を福井大学図書館で見ることがあった。

この書には瓜生の安政五年十七歳から明治四十四年七十歳までの自作漢詩があり、瓜生の漢学へも目を見張るものがあった。筆者所蔵の『梅村寿筵生彩集、梅村己亥以後詩』(明治三十六年)と併せて、英学、漢学の両面から瓜生 寅についてさらに追ってみたい気持ちになっている。

昨年夏、瓜生 寅の曾孫にあたるピアニスト瓜生幸子さんから演奏会のご案内があつて、初夏の一夕を名古屋のホールでピアノ瓜生幸

子とウィオラ奏者のデュオを楽しんだ。瓜生さんはもっぱらドイツを中心に演奏活動を続けておられる。

主な参考資料

- *The Mikado's Empire*, by W.E.Griffis, New York, 1876.
- *Verbeck of Japan*, by W.E.Griffis, New York, 1900.
- 牟田豊訳述『日本近世変革論』上下、明治十五年。
- 一論文『日本近世変革論』考—グリフィス論文 *The Recent Revolution in Japan* の翻訳から— 山下英一
- 『英学史研究』第25号(一九九二年)。
- 『フルベッキ書簡集』高谷道男編訳(一九七八年) 新教出版社。
- 『明治維新とあるお雇い外国人—フルベッキの生涯—』大橋昭夫 平野日出雄著(一九八八年) 新人物往来社。
- 『パークス伝—日本駐在の日々—』F.V.テイキンズ『高梨健吉訳(一九八四年) 東洋文庫。平凡社。
- 『鴻爪痕—前島密伝—』(大正九年) 前島会発行。
- 『ウィリアム・エリオット・グリフィス君 明治維新当時の懐旧談』(昭和二年) 維新史料編纂会。
- 『幕末明治耶穌教史研究』小沢三郎(一九七三年) 日本基督教団出版局。
- 『金沢泉丘高等学校蔵善本解題目録』石川県立金沢泉丘高等学校編集(昭和五十六年)。
- 『福井市史 資料編5 近世三』福井市(平成二年)。
- 『松平春嶽末公刊書簡集』伴五十嗣郎編(平成三年) 福井市立郷土歴史博物館。
- 『福井城下ものがたり』舟沢茂樹(昭和五十一年) 福井PRセンター発行。
- 『瓜生 寅の履歴と著作』渡辺 宏(昭和五十四年) 日本古書通信第四一八号。
- 『グリフィスと福井』山下英一(昭和五十四年) 福井県郷土新書5。
- 『明治日本体験記』グリフィス 山下英一訳(一九八四年) 東洋文庫。平凡社。